

外国語活動・外国語

「ことば」や文化への理解を深め
コミュニケーションを豊かに創る子



外国語活動・外国語

「ことば」や文化への理解を深めコミュニケーションを豊かに創る子

中村 香

昨今、SDGsと関連付けて地球規模の課題に取り組む姿勢が社会でも学校現場でも広がっている。外国語活動・外国語も、教科横断的な学びと絡めた様々な実践が行われている。現行の学習指導要領でも、共生社会実現のために必要な国際コミュニケーションとしての力や、異なる文化や言語をもつ人々と心を開いて主体的にかかわろうとする態度を身に付けたグローバル人材の育成が求められている（文科省、2017）。本校外国語部は、体験的な言語活動を大切にしながら、ことばやその背景にある文化についても興味をもって知り理解を深めることで、言語の知識だけでなく様々な場面や目的に応じてコミュニケーションを豊かに創る子をめざす。

外国語

1. 外国語活動・外国語の研究テーマ

(1) 現代的な課題・問題意識など

小学校の新学習指導要領が全面実施され、高学年の外国語活動が領域から教科となり5年目を迎えた。教科化された外国語では、これまで以上に主体的に外国語(英語)で他者とコミュニケーションを行うための「コミュニケーション能力」を育成することを重視している(文部科学省、2017)。さらに、外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、情報や考えなどを形成、整理、再構築する、「コミュニケーションにおける見方や考え方」を豊かで確かなものにすることも重要であると示している(文部科学省、2017)。なぜならば、昨今の異常気象や自然災害、地球温暖化、紛争、貧困問題や新型コロナウイルスなどの世界状況を鑑みても、国境を越えた地球規模の課題解決や実現に向けて、世界の国々がいかに持続可能な社会を築いていくかが問われている。このことは、2015年9月の国連サミットで採択された2030年までに持続可能でよりよい世界をめざす国際目標としてSDGsにもすでに示されている。また、日本国内においても多国籍化、多文化化、多言語化が加速している中、英語教育は単に知識を習得させるのが目的ではなく、「共生社会実現のために必要な国際コミュニケーションとしての力や、異なる文化や言語をもつ人々と心を開いて主体的にかかわろうとする態度を身に付けたグローバル人材の育成」(文部科学省、2017)を見据えた英語教育が求められている。

(2) テーマ設定の理由

本年度、英語部の研究テーマは、『「ことば」や文化への理解を深めコミュニケーションを豊かに創る子』とした。なお、英語部における「ことば」とは、語彙や語句という狭義的な「言葉」も含め、ストーリーや歌の歌詞や、子供が自分の考えや思いを表現したものとしての「言語」など広義的なものとして捉えることとする。「ことば」は、子供が出会う単語や文章やストーリーだけではない。以下に明記したものを全て含める。これまでの実践研究により、子供は英語だけで学ぶのではなく日本語での学びが切り離せないことから、4つめを新たに加えることとした。

- 子供が発している英語（時にまだ正しく発音できていないもの）
- 子供が自分の思いを伝えようとジェスチャーや表情といった非言語を伴って発している英語
- 子供が耳から聞いた英語を自分なりにカタカナで表記している文字等
- 子供が英語を理解するために使用している日本語

外国語の学習を通して、外国語や外国文化と日本語や自国の文化への関心を高めるとともに理解を深め、多文化社会で「共存・共生」していくために必要となる多様性を尊重したり認めたりする「受容する態度」とともに、多様な文化背景を持つ人々に、自分自身や自国のことを伝える「自己表現する姿勢」を涵養していくことをめざす。

① 「ことば」や文化への理解を深めとは

「ことば」への理解とは、語彙や発音、文法といった表面的な部分の理解だけではなく、日本語の思考や認知能力が伴ったものである必要がある。そうでなければ、実際に自分の「ことば」として活用していくことができない。これは、下図1. カミンズの「第二言語能力の氷山説」にあるように、二つの言語は語彙や文法、文字や発音など表面的な部分にそれぞれ独自の特徴があるため、独立して存在しているように見えるが、実は二つの言語は思考や認知など深い部分において共通していることを示している。それが、Common Underlying Proficiency（共通基底能力）であり、第二言語能力は全く異なる言語を習得しているのではなく、言語習得の中で共通する能力（思考や認知）であり日本語で獲得した概念や思考が第二言語を理解したり獲得したりする時に応用されるという考えである。だからこそ、日本語の言語能力を考慮した外国語活動が求められる。次に、文化とは、下図2. ホールの「異文化理解の氷山モデル」が示すように、「目に見える表層文化」と「目に見えない深層文化」とがあることを示している。表層文化とは、言語や習慣、儀式といった明白で目に見えるものである。一方、深層文化とは、価値観や信念、暗黙のコミュニケーションといった目に見えない、同一文化内において暗黙的な側面のことを表している。また、表層文化は、その文化のごく一部にすぎず、深層文化の方がはるかに多くの部分を担っている。つまり、異文化を理解するには言語だけでは理解しきれないものが多い。だからこそ、外国語において、Tokyo Global GatewayでのEnglish Speakerとの英語体験や留学生との交流体験といった本物の言語活動が重要となってくる。これらの体験的な言語活動を通して、言語だけでなく他者の価値観や信念も含めてコミュニケーションをする必要があることを学べるからだ。

② コミュニケーションを豊かに創る子とは

外国語における言語活動を通して、「ことば」や文化を理解していく姿の中には、外国語や外国の文化だけでなく、日本語や自国文化への再認識も行われると考えている。さらに、特に国際共通語としての英語を、母語やこれまでの言語経験を活かしながらコミュニケーションをするための「ことば」として獲得していくことを通して、自分なりのコミュニケーションをする時の幅や奥行きを創っていく子をめざす。例えば、自己紹介をする際に、どの英語表現を使って、どの順番に、どんな表情や、視覚的資料を用いて伝えるのか、個々の思いや英語力に合わせて異なったものになって当然であるという前提をもつ。さらに、個々の英語での自己紹介が、子供自身がめざすものをしていこうとする姿が、豊かにコミュニケーションを創っていく子と考える。

図1. カミンズの「第二言語能力の氷山説」

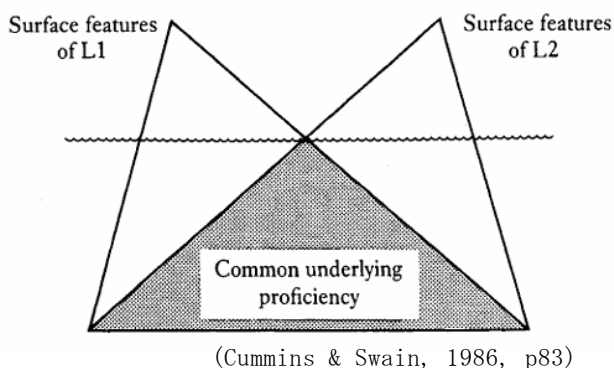
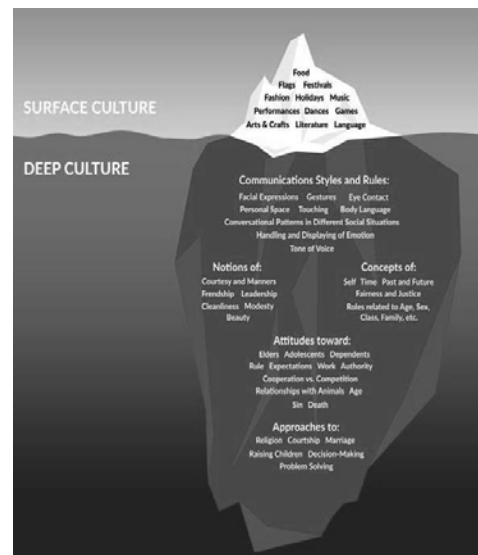


図2. ホールの「異文化理解の氷山モデル」



2. 全体研究テーマとの関連

(1) 外国語活動・外国語の本質の吟味

学習指導要領に示された外国語活動・外国語の「見方・考え方」とは、以下の通りである。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方とは、外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」である。

(小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語）

この「見方・考え方」を働かせて、「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」を育成することが目標となっている。外国語教育を通して育成を期待している「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」は、「知識及び技能」が（１）、「思考力、判断力、表現力等」が（２）、「学びに向かう力、人間性等」が（３）として学習指導要領（文科省、2017）に示されている。その中で、「（３）外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」（p72）という「学びに向かう力、人間性等」の目標は、「子供が言語活動に主体的に取り組むことが外国語によるコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を身に付ける上で不可欠であるため、極めて重要な観点である。」（p73）ことを押さえておきたい。なぜなら、それは「社会や世界の中での自分の役割や立場を理解し、主体的に行動する態度」の育成をめざすことで、「異なる文化や言語に対する理解と尊重」や「自分の考えや気持ちを適切に表現し、他者と効果的にコミュニケーションを図る能力」の学びが実際に活用することにつながるからである。つまり、外国語教育は単なる言語の習得を超えて、グローバルな視点でのコミュニケーション能力の育成をめざしていると捉えることができる。類似した見解として、細川(2016)は、言語教育の重要な使命として、市民性形成を主張している。教室での外国語科学習の役割と意味として重要なのは、「この混迷する社会の中で、価値観の異なる多様な他者との関係において、ことばによって自己表現するとともに、その他者を理解し、共に住み良い社会をつくっていくこととそのための意識改革であろう」（p191）。それは、「行為者一人一人が、一個の言語活動主体として、それぞれの社会をどのように構成できるのか、つまり社会における市民としてどのような言語活動の姿勢が求められるのかという課題と向き合うことである」（p191）。上述の外国語の本質を踏まえ、外国語部では、外国語を学び始めたばかりの本校の子供たちに、市民性形成を意識したカリキュラムで、発達段階にあった題材や外国語表現を扱いながら、スパイラルな言語習得とコミュニケーションを豊かに創る子の育成を図っていく。

（２）一人一人の子供が本質を味わう学びのデザイン

① 学習の主導権に着目した際の「自律的な学習」と「他律的な学習」

「自律的な学習」の観点から、小学校外国語において、学習指導要領でも子供の言語習得理論の概念からも、明示的ではなく暗示的に子供の気付きを促す学びが推奨されている。そのため、This is a pen. といった単文を提示して説明することはしない。小学校の外国語では、授業者が様々な文房具が入った袋を示しながら、“What do I have in my bag?”、“Can you guess?”と子供に尋ね、子供が“ペン”といったら、“Do you think I have a pen in my bag?”とほかの子供にも訪ね、“Yes, I have a pen in my bag.”と言って、袋の中からペンを取り出して示す。このように、文脈（あるコンテキストの中である程度まとまった英語）を視覚的資料、ジェスチャーといった言語以外のものも駆使して、子供とのやり取りを通して行う。しかしながら、全く知らない英語の語彙や表現を限られた時間の中で学ぶには、授業者が意図している言語表現の提示や学習活動の枠組みを、学習者に示す必要がある。外国語を学ぶ際に、初期の段階ではこちらが順序立てて学習していく「他律的な学習」が多いが、徐々にこれまでの学習経験や既習事項を活用して子供が「自律的に学習」していけることが理想である。その際に、デジタル教科書やICT機器の有効的な活用や、他の子供との協働的な学びの場が鍵となる。

② 学習形態に着目した際の「一人学び」と「学び合い」

これまでの小学校外国語の授業において、教師が30人以上の子供たちの個々のニーズに応えきれないことから、教師対学級全体とのやり取りや教師が主導となり子供へ課題を提示し、個々の子供の発話や発言を教師が繋いで学級全体での学び合いの後、ペアやグループでのやり取りを行い、最後に個々に振り返りをさせる授業が一般的であった。しかし、一人一台端末と今年度より改訂された学習者用デジタル教科書があることで、英語表現や語彙を調べたり、英語の正しい音声を聞いたり、モデルとなる英語を話している動画を観たりと、子供たち個々の学習スタイルや必要に応じ、学び方を選択することが可能になった。さらに、Teams上でのお互いの学びや考え等の共有も容易になり、教師が子供の質問に全て答えたり教えたりしなくても、子供同士での学び合いが可能になった。そこで、外国語の授業でも、積極的に個々の学習活動の場と子供同士の学び合いの場を設定していき、子供の主体的な学びを育んでいく。そうすることで、自ら学びを創る子になると期待している。

3. 研究の重点

（１）子供が英語でコミュニケーションしたくなる言語活動の設定

① 目的、状況、場面の設定

子供が、コミュニケーションを創るためには、子供自身に目的意識がなければならない。そのためには、子供の発達

段階にあった題材や活動、場面設定などを提示することが大切である。子供が、面白そう、もっと知りたい、言ってみよう、やってみようと思えるような題材と出合わせる工夫をする。また、コミュニケーション能力は他者とのかかわりの中で培われるため、子供の実態に合った生きた言語活動の場の設定を提示していく。また、限られた授業時間の中で目的意識を持続させるだけでなく高めるためには、外国語活動・外国語の授業時間以外での学びも視野に入れる。具体的には、地球規模の課題やSDGsの視点、教科横断的な視点も含め、担任や他の専科教員との連携やカリキュラムマネジメントなども取り入れていく。そうすることで、英語への苦手意識をもっている子供にも、英語以外の分野から目的意識をもつことができることを期待している。

② 間違えることで学んでいく学習集団づくり

外国語を学び始めたばかりの子供たちが、理解し扱える英語表現は限られている。その限られた英語表現を駆使してできるやり取りを通して、コミュニケーションの楽しさや面白さを体験できるようにする。また、聞いて分かる英語と分かって英語で発話して伝えられる英語には、ギャップがあることを踏まえて、授業で扱う。また同時に、間違えながら学んでいくことを積み重ねて間違えても大丈夫という学習環境を築いていくことも大切である。そのために、どのような教師のフィードバックが良いのか、またどのような学び合いの場づくりが良いのかを実践を通して省察していく。

(2) 子供の学びの可視化

小学校の外国語活動・外国語の授業では、音声を中心とした学びのため、子供が何をどのように学んでいるかを授業者が把握することは容易ではない。また、子供自身も、自分が何をどのように学んでいるかを意識せずに行っている場合もある。そこで、ICTを活用した音声や動画の視聴だけでなく、子供自身の英語の録音や録画をすることで、学びを記録したりお互いの学びの振り返りを共有したりする。さらに、同じ学習者同士で互いの成長やアドバイスをし合うピアフィードバックや自分の学びを振り返って言語化する場を意図的に設ける。そうすることで、自分自身や友達の学びをメタ認知することができると考える。

4. 成果と課題

今年度の研究の成果は、外国語活動・外国語における学びの本質と学びのプロセスを再考し、教師主導による学習形式だけでなく、子供が主体となって学んだり、子供同士で協働したりできる学習環境を多く設定することができたことである。それにより、個々の子供が、自分なりの学びのめあてをもって学び方も選択し学ぶ姿を見ることができた。これまで、教師がstep by stepで丁寧に教えていた英語表現も、十分なリスニングの後に、例を示しポイントを共有することで、主体的に自分の伝えたい表現を考える子供も多く見られた。また、本時のめあてや振り返りなどをTeamsへ投稿させることで、個々の学びの言語化により個々の学びの可視化とメタ認知的学びになると同時に、共有されたお互いのめあてと振り返りからよいところを取り入れたり真似たりする学びが生まれていた。

一方、課題として2つ挙げる。一つは、外国語活動・外国語における相手意識の醸成である。特に、コミュニケーションの相手が、授業学級以外の他学級や他学年、他の学校の子供たちや他国の子供や留学生の場合には、コミュニケーションの必然性だけでなく、コミュニケーション相手について共通理解する場を設ける等丁寧に行っていく必要がある。今年度の研究を通して、子供たちが自然と相手の立場や状況を意識し、主体的にコミュニケーションができるようになるための示唆が得られた。もう一つは、これまでも課題となってきた、子供たちが伝えたいことを如何に知っている英語で表現できるかという難題である。学年が上がるにつれて、子供の母語での表現能力と外国語である英語での表現能力の差が大きくなっていくため、言いたいことを母語で考えそれをそのまま英語にしたいと思う子供が、翻訳機能を容易に使ってしまうことがある。しかし、翻訳機で提示された英語の良し悪しを判断することも、読んだり理解したりすることもできない。やはり、子供たちが知っている英語、習った英語表現を駆使して自己表現することができるようになるためには、日々の学びでの積み重ねが重要であり、今後の実践研究で他の課題も含めて省察していく。

【参考文献】

- ・細川英雄、尾辻恵美、マルチェッラ・マリ奥特ティ(編)(2016)『市民形成とことばの教育—母語・第二言語・外国語を超えて—』くろしお出版
- ・文部科学省(2017)「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語(平成29年度告示)」
- ・Cummins, J. & Swain, M. (1986). Bilingualism in Education: Aspects of theory, research and practice. London, UK: Longman.
- ・図2: 出典 <https://bccie.bc.ca/wp-content/uploads/2020/09/cultural-iceberg.pdf>

子供が主体となる学びのプロセスの挑戦

―第5学年「身近な人を紹介しよう」の実践から―

中村 香

1. 課題意識

(1) 課題意識について

日本の学校における外国語教育は、「単なる言語の習得ではなく、共生社会実現のために必要な国際コミュニケーションとしての力や、異なる文化や言語をもつ人々と心を開いて主体的にかかわろうとする態度を身につけるグローバルな人材の育成」（文部科学省，2017）を目指している。では、この外国語教育の目指す視点からは、授業を実践している授業者はどれだけのいるのだろうか。「単なる練習」や「楽しいゲーム」、「形だけのインタビュー活動」の授業になってしまっていないだろうか。前述のような授業について問題視ができていたとしても、「意味のある言語活動」の積み重ねをどのように実践したらよいかと頭を抱えている授業者は少なくないだろう。また、指導と評価の一体化を意識し、外国語の授業で「知識・技能」や「思考・判断・表現」を評価するための活動や振り返りに必死になりすぎて、児童の成長や躰きの姿に気付かぬまま評価ありきの授業となってしまうことも往々にして見られる傾向ではないだろうか。また、限られた授業数の中で、教科書の内容を満遍なく全て教えようとすると、各単元を6～8時間に設定し、急いでターゲット表現に慣れ親しみ、ターゲット表現を用いて形式的に自分の思いや考えを相手に伝えるコミュニケーション活動をするることになり、授業者だけでなく学習者にとっても窮屈でせわしない学びになってしまう。

そこで、本実践では、単元ごとに英語でのコミュニケーション評価をするのではなく、複数のUnitを結合することで学びの時間的なゆとりをもって、英語表現や学習方法に幅と児童の能動的な学びの場を確保することができる授業を提案する。そうすることで、単元ごとに学びが途切れることなくつながっていくと共に、言語習得理論にもあるスパイラルな学びによる言語習得も可能になると考えた。

(2) 単元について

1学期に自己紹介として一人称での名前、スペル、出身や好きなこと、誕生日の英語表現を学んだことを踏まえて、今回は、身近な人を紹介するために、三人称のHeやSheを用いた英語表現を学ぶ。5年生も、日本語であれば自己紹介も他者紹介も容易にできるが、英語では、「be動詞のamがisになったり」、「原型動詞が三単現のsが必要になったり」、「myだったものをhisやherなどの表現を適宜使わなければならない」など、言語的な正しい表現についての学びが求められる。本単元の第一次で、オリンピック選手クイズをグループでつくる活動をした際には、His/Her birthdayをMy birthdayやHe/She birthday, He/She is birthday isといった間違いが見られた。その際には、間違っていることを指摘せず、正しい英語表現を授業者がリキャスト（自然の会話のやり取りの中で児童の間違いの含んだ発話を、意味を変えずに、間違えた部分を訂正した言い直し）することで、児童自身が気づく姿が見られたが、まだ定着はしていない。

本時を含む第二次では、この三人称を使った表現を、児童が自分たち自身で学びとっていけるかが、外国語の本質を味わう学びの焦点の1つである。これまでは、授業者が、正しい英語表現を伝えることが当たり前であったが、同じ間違いを繰り返すことが多い。児童自身が間違いに気づいて、正しい英語表現を学んでいくことで、正しい英語表現が定着していくと考えた。そのために、児童が主体的に学習ツールを選択する学習活動を設定する。学習ツールとしては、これまでの既習事項や学習経験、デジタル教科書やピクチャーディクショナリー、児童同士の学び合い、教員への質問などがある。児童から、さらなる別の有効なツールが出てきた場合は、全体に共有していく。

さらに、今回は、東久留米市の公立小学校の5年生と都内の附属小学校の5年生、アメリカのミドルスクールの生徒と「学校の先生を紹介する動画を交流させる活動」を設定した。これにより、児童が自分の伝えたいことや表現したいことを伝えるために、適した内容や表現であることだけでなく、英語の発音やイントネーションやピッチといっ

た英語の発話の正確さ、紹介する内容の順番や視覚的資料などによる工夫も含めた、外国語におけるコミュニケーションの本質を味わうことを可能にする。

このように言語的にもそれ以外のコミュニケーション方法の工夫の面でも、個々の児童の思考力や判断力が求められる本単元で、児童の主体的な学びの広がりや深まりを期待している。さらに、グループで協働して同じ目標に向かって課題解決をする学びを通して、お互いに学び合い、コミュニケーションを豊かにしていけるのではないかと考えた。本単元学習後、3学期には自分のあこがれの人についてのクイズを三人称の表現を用いて表現する活動を行う予定である。このように、同じような表現を目的や状況、場面を変えながらスパイラルに学んでいくことで、スパイラルな言語習得の理論においても、理にかなったものとなると考えた。

(3) 児童の実態

本学級の児童は、積極的に発言する6名程の児童が外国語の授業をリードしていくことが多い。外国語の授業についてのアンケート(34人の児童が回答)では、英語の授業が「とても好き」(12人)、「まあまあ好き」(17人)と答えた児童が29人(82%)で8割を超えているものの、「あまり好きではない」と答えた児童が5人(15%)、「全然好きではない」と答えた児童が1人(3%)いた。このように答えた理由を聞いたところ、「とても好き」と答えた児童の多くは、英語でのコミュニケーションに慣れているため自信があり、英語の学習も楽しいものとなっていた。しかし、「あまり好きではない」と答えた児童の理由には、英語を話すことに自信がなかったり苦手意識があったりすることが分かった。また、5年生の児童は、本実践の前にTokyo Global Gatewayで英語体験学習を行った。英語が得意な児童も、苦手な児童もEnglish speakerとの濃密な英語によるコミュニケーションのやり取りを通して、少しでも英語学習に対してポジティブな態度になっていることを期待している。

2. 研究テーマとの関連

(1) 本単元における外国語の本質の吟味

本単元における、外国語の学びの本質の1つは、身近な人を英語で紹介するために必要な言語表現を理解し、適切に活用することができる、言語的な側面での学びである。もう一つは、身近な人を紹介する他者に配慮した、身近な人を紹介するにふさわしい内容と順序、英語の発音、イントネーションやピッチ、及びジェスチャーや表情、視覚的資料等を含めた非言語表現での工夫も、外国語での学びの本質の1つである。ただし、こちらは、外国語だけではなくコミュニケーションを必要とするすべての場面にも適応できるものである。

(2) 一人一人が本質を味わう学びのデザイン

① 学習の主導権に着目した際の「自律的な学習」と「他律的な学習」

本単元では、「他の学校の5年生と、自分の学校の先生の紹介動画を英語で作成し、交流し合おう」という目的をもったうえで、自分が選んだ紹介したい先生別でグループとなり課題を解決しながら学習活動していく。これにより、学級全体にとって包括的かつ一人一人にとっては切実な個別の課題意識をもって学ぶことができると考えた。

児童のこれまでの学びを基に、「自律的な学習」の場をできるだけ多く設定したいと考えた。そのために、児童自身が学習のツールを選び、自分で試行錯誤しながら英語表現や非言語表現を考え動画を完成させていくことを期待している。学習のツールとして、これまでの既習事項や学習経験、デジタル教科書やピクチャーディクショナリー、児童同士の学び合い、教員への質問などがある。しかしながら、限られた時間での学習においては、授業者がタイムマネジメントや課題解決のために役立つ学びの共有など、ファシリテーターとしての働きが重要となってくる。その際に、学習者にとっては「他律的な学習」の場となることもありうるが、あくまでも個々の課題解決のための必要な学びの場になることを狙って設定する。また、全体で児童の失敗や間違いを、授業者がどのような学びとして見取るかを示すことで、失敗や間違いの中から多くの学びがあることに気づかせることができる。さらに、実際に児童がこれらを体験し積み重ねることで、お互いに失敗や間違いながらも楽しく学び合える学習集団づくりをめざす。

② 学習形態に着目した際の「一人学び」と「学び合い」

本単元が、「包括的かつ個人的な課題になっていること」と、「できる限り児童たちで紹介動画を完成させていく学習デザイン」の中で、児童が個々に学ぶ姿と同じグループのメンバーや他のグループのメンバーとの学び合う姿の両方が混在することを期待している。個々の学ぶ姿としては、タブレットを活用して英語の発音練習をする姿やデジタル教科書やピクチャーディクショナリーを活用して日本語を英語に直す姿などが挙げられる。学び合いの姿としては、友達に英語の発音を聞いてもらいながら練習する姿、友達に教えてもらいながら練習する姿、日本語から英語に直すのを一緒に考えたり調べたりする姿、グループを超えて聞き合ったり教え合ったり姿などである。なお、学び合いを促進するツールとして、Microsoft teams を積極的に活用する。

(3) 学びの可視化と学びの共有

本単元では、Microsoft teams に、今回の単元第2次「先生を紹介しよう」チャンネルを設定した。このチャンネルに、各グループが投稿し、そこで共同作業したり、各時間での学びの軌跡を残したりしていく。そうすることで、①学びの連続性が容易になることだけでなく、②他のグループの学びの状況も知ることもできる。これまで一斉授業で一部の児童の発言により学びの状況を共有してきたが、この teams を活用することで、より多くの児童の考えや学びを全体で発表せずとも容易に共有することができる。さらに、教師も、机間指導やワークシート等の振り返りで把握していた児童の学びをいつでもどこでも知ることが可能となることで、必要な支援や指導を把握しやすくなり、児童の学びの実態に応じたフィードバックも効率的にできると考えた。

3. 実践の実際

(1) 単元名 「身近な人を紹介しよう！」 題材：『Unit4: Who is this?』 New Horizon Elementary 5

(2) 単元目標

- ・“Who is this?” や “She/He can…” 等の表現を理解して聞いたり、発話したりすることができる。(知識及び技能)
- ・自分の伝えたい身近な人のできることや性格など、ターゲット表現や既習の英語表現を活用して、仲間と協働し工夫して紹介することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・他者に配慮して、身近な人を伝えようと非動画によるコミュニケーション活動を、主体的にしようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

(3) 実践の分析・考察

① 学習計画

- 第1次 身近な人を紹介するためのターゲット表現の英語に慣れ親しもう。……………4 時間
 第2次 ターゲット表現や既習表現を使って、身近な人を紹介しよう。……………6 時間
 第3次 お互いの動画を交流し、フィードバックをし合い、学びを振り返ろう。……………2 時間

② 学びの軌跡

第1次 身近な人を紹介するためのターゲット表現に慣れ親しもう

本単元では、これまでの単元で習ってきた名前 (“I’m” / “My name is”), 出身 (“I’m from”), 住んでいるところ (“I live in”), 誕生日 (“My birthday is”), できること (“I can”), や得意なこと (“I’m good at”)などを基に、第三者を紹介するため He/She を主語にした英語表現を取り扱う。そのため、He と She が含まれた英語表現に慣れ親しむために、2024 パリオリンピックで活躍したスポーツ選手を題材にしたクイズを用いて導入

Quiz “Who is this?”
 Hint 1: He is from Ehime.
 Hint2: His birthday is February 25th.
 Hint3: He is good at playing golf.
 Hint4: He got a bronze medal in the Paris Olympic.
 Who is this? Can you guess?

図1. オリンピッククイズの例題

をした。図1は、実際に出したクイズの例題である。5年生の子供は、He と She を英語の授業で扱うことは初めてではあったが、授業者が発話から分かる英語やキーワードを聞き取ることで、大体の意味を推測し考える姿があった。

ただ、学級によっては、The team Japan のメンバーがうろ覚えだったり、パリオリンピックの結果を知らなかったりする児童が多かった。事前に、どのようなテーマや人物をクイズにしたら良いか調べておくことで、より多くの子供の興味を惹くことができるとともに、より記憶に残る英語表現となっただろう。

第2次 ターゲット表現や既習表現を使って、身近な人を紹介しよう

第1次で扱ったターゲット表現を基に、全体で小森校長先生を紹介する英文を作成した。小森先生について知っている情報と自分たちが表現できる英語とを吟味しながら完成させた（図2）。その際に、クイズではなく紹介文であることも全体で意識し共有した。

その後、紹介したい先生を決め、2人または3人のグループで活動をした。これは、個人の紹介したい思いが主体的な活動になることを期待し、また個々の英語力に差がなくても協力しあい、全員が英語の学び合いを行えるように考えた。実際、このグループでの学びは、有効に機能していた。グループ学習では、Teams 上の「先生を紹介しよう」チャンネルに「本時のめあて」と「その日の動画」と「振り返り」を投稿させ、自分のグループだけでなくどのグループの投稿も見られるようにした。そうすることで、お互いの学びを見合い、良いところを真似したり参考にしたりする姿が見られた。ここでは、2グループの学びの変容を記載する。



写真1 グループA



写真2 グループB

Hello, we will tell you about our teacher.
He is Mr. Komori Shinichi.
We call him Komori-sensei, Komochi-sensei.
He is our principle.
He is from Kanagawa.
His birthday is August 24th.
He is very kind.
He loves nature.

図2 完成した校長先生の紹介文

グループAは、自分たちでめあてを決め、主体的に学習が進めていた。特に、英語が得意なメンバーが進んで紹介文を作成し、声を掛け合って練習し、動画撮影を何度も繰り返していた。話し合いや教え合う中で、主体的で協働的な学びが創られていた。さらに、英語の発音だけでなく、相手意識をもって、視覚的資料をパワーポイントで作成したり、「カメラ目線」や「間」や「ジェスチャー」といった非言語表現にまで意識し上達する変容が見られた。

グループBは、英語が得意ではないが、大好きな先生を英語で紹介する動画作成には意欲的な3名だった。そこで、紹介文づくりでは、個別に支援をしながらIとmyをHeとHisに変える表現を確認した。その後は、カメラで撮影し練習を英語の発音を何度も確認しながら、カメラでの練習繰り返していた。撮った動画を見返しては撮り直すことを繰り返す学びが続いていた。英語の上手い下手にかかわらず、目的意識をもって主体的に学びが続く中で、自然と英語の発話も上達する変容が見られた。

4. まとめ

本実践を通して、他の学校の5年生に「好きな先生の紹介をしよう」という学習課題が、包括的かつ個別的な問いとなり、「一人学び」と「学び合い」が共存しながらも有効に行われていた。また、Teamsに学びの履歴を共有したことで、グループ内での共通理解や学びの形成的な評価と同時に、他のグループの学びを参照するなど、子供たちの学び合いが自然と創られた。このことは、今後の学習環境づくりに大きな示唆となった。一方で、相手を意識した紹介内容が作れなかったり、既習表現を活用せずに翻訳に頼ってしまったりしたグループには個別に支援に入ったが、そうなる前に何かしらの手立てができたのではないと思う。今後は、見えてきた課題に取り組んでいきたい。